

# 『源氏物語』の書かれた時代と

## 『源氏物語』に書かれた時代

難 波 喜 造

### I 一家に三后を立つ

——藤原道長の時代——

この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば

一〇一八（寛仁二）年一〇月一六日の夜、藤原道長は、三女威子が後一條天皇の中宮に冊立されたことを祝う竟宴の席において、参集した人々に前に即興でこの歌を詠じたという。その場に居あわせ、この歌を自分の日記『小右記』に書き止めた大納言藤原実資は、この夜の記録を次のように書き起こしている。

今日、女御藤原威子ヲ以テ皇后ニ立ツルノ日ナリ。前太政大臣ノ第三娘。一家ニ三后ヲ立ツ。未ダ曾テ有ラズ。

「前太政大臣」以下は小文字の割り書きで注記の体裁をとっているが、「一家立三后、未曾有」という簡潔な表現の奥に籠められた実資の複雑な心情がうかがわれて興味深い。これより数年前、

病床に臥した道長がみずから再起を危ぶみ、実資を招いて、苦しい心境を訴えるということがあった。『小右記』一〇一二（長和一）年六月九日の條を見ると、実資は、数日來の道長の病状などを詳しく書き止めているのだが、その日道長は、「自分の命はもはや惜しいとも思わないが、三宮（彰子、研子の二后と東宮敦成）のことが気がかりでしかたがない、皇太后宮（彰子）は去年夫の一條院を失ってからずっと哀傷の思いに沈んでいる。」と洩しながら、しばしば落涙したとある。さらに同月二〇日の條には、二、三人の廷臣の噂話であるがとことわりながら、道長の病を喜ぶ公卿が五人あるとして、道長の異母兄大納言道綱、中納言実資、同隆家、参議懷平、同通任の名をあげている。廷臣の間でこんなことがささやかれる程に、朝議の席に連なる高官の中にも、道長の専横に反撥しそれを憤る人々がいたということになる。他人の噂の形をとっているが、実資が五人の一人として自分自身の名を記していることに注目してよいだろう。他の資料にてらしてみても、どうかすると前例を無視して我意を貫くことの多い道長に

対して、実資が批判的な気持ちを強く抱いていたことは疑う余地がない。道長にとつても、その実資は何かにつけて気がかりな、心くばりを怠ることのできない相手であつたようだ。

道長が、権大納言のままで内覧の宣旨を受け、藤原氏の「氏の長者」の地位に即いたのは九九五（長徳元）年五月、三十歳の時であつた。五年前に父の兼家から関白を受け継いだ兄道隆が、四十歳の壮齡で倒れ、それを引き継いだ次兄道兼が「七日関白」の名を残して急死した為である。道隆の娘である中宮定子に深い愛情を抱いていた一條天皇には、定子の兄内大臣伊周を後任に据えたいという意向もあつたが、天皇の生母詮子が弟の道長を推して譲らず、天皇の方が折れて道長に内覧の宣旨を下したいきさつは『大鏡』道長伝に詳しく記されている。間もなく伊周を超えて右大臣に昇つた道長は、事ごとにこの甥と争いを繰り返していたが、女性の問題をめぐる誤解から、花山法皇に対して矢を射かけるといふ不敬のふるまいを犯した伊周の過失をとらえ、内大臣伊周を大宰権師に、その弟中納言隆家を出雲権守に貶すという人事を断行する。事実上は配流の刑に処したわけだ。こうして最大の政敵を失脚させることに成功したのは、九九六（長徳二）年四月のことである。この事件で最も打撃を受けたのは中宮定子で、ことの直後に落飾して尼となっている。しかし、定子に対する天皇の寵愛はいぜんとして衰えることもなく、九九九（長保元）年には、先年の内親王に続いて皇子を生んでいる。一條天皇の第一皇子敦康親王である。

#### 〈第一の后〉

道長が漸く十二歳に達したばかりの彰子を入内させることに踏み切つたのは、定子の懷妊を知つて、焦りを抱いたからだとみてよいだろう。敦康親王生誕の当日に、彰子は女御の地位を得た。帝の道長に対する心使いに基づく措置と考えられる。しかし、それで満足する道長ではなかつた。翌年二月、彰子は中宮に冊立され、そのために定子は中宮の稱を改めて皇后と呼ばれることになつた。こうして歴史上に前例のない二后並立の時代が現出したのであるが、その年の末にまた皇女を出産した皇后定子は、精神的な疲れもあつたのであろう、産後の健康を回復しないまま二十五歳の若さで世を去つた。

中宮彰子が、道長待望の皇子をもうけたのは、入内後九年めの一〇〇八（寛弘五）年九月一日のことである。敦成親王と名付けられた。彰子が皇子出産のために道長の邸土御門殿に里下りしたのは七月一六日であつた。「秋のけはひ入り立つまに、土御門殿の有様、いはむかたなくをかし」と書き始められた『紫式部日記』が、皇子の安産祈願の様子から、出産後のかずかずの儀式の華やかな模様まで、こと細かに書き尽くした貴重な記録としての一面を持っていることは広く知られている通りである。皇子生誕後一か月あまりの箇所に次のような記事がある。

十月十余日までも、御帳出でさせ給はず。西の傍なる御座に、夜も昼もさぶらふ。殿の、夜中にも晝にも参り給ひつゝ、御乳母の懷をひき捜させ給ふに、うちとけて寝たる時などは、何心もなくおぼはれておどろくも、いといとほしく見ゆ。心

もとなき御程を、わが心をやりてささげうつくしみ給ふも、ことわりにめでたし。ある時はわりなきわざしかけ奉り給へるを、御紐ひき解きて、御几帳のうしろにて、あぶらせ給ふ。

「あはれ、この宮の御尿に濡るるは、嬉しきわざかな。この濡れたるあぶるこそ、思ふやうなる心地すれ」と、喜ばせ給ふ。

中宮は、産後の気分がなおすぐれず御帳台（ベッド）を離れようとなさらないので、紫式部たち女房は夜も昼も付きっきりの状態である。そんなところへ道長は、夜中だろうが明け方だろうがおかまいなしに、ひよいとやって来ては、乳母に抱かれて眠っている初孫の皇子をのぞきこむのが常であったという。そして、まだ何もわからない幼児を「ささげうつくしむ」すなわち、高い高いをしては満足するような様子であったとも言うのである。またある時には、抱いていて小水をもらされ、几帳のかけで濡れた衣類を火にあぶって乾かしながら、傍にいた紫式部に「若宮におしっこをひっかけられるのは、何とまあ嬉しいことだね。こうして濡れた着物を火にあぶっていると、これ以上の喜びはないという気がするよ。」と語りかけて、ほんとうに嬉しそうな様子であったと書き止めている。「ことわりにめでたし」——そうした道長の姿を紫式部もあたりまえなことと見てとっているわけだが、帝位に登るはずの初孫の将来を思い描いているに違いない道長の胸中を見透してのことだと言つてよからう。

翌年一月二五日、彰子は続けて皇子を出産した。敦良親王である。道長にとつても、皇位は絶対的なものであり、それが彼の現世での限らない栄華を保証する唯一最高の権威であった。彼が

その政治力をかたむけて志した皇室への密着工作の最初の布石は、確実に実を結んだといつてよさそうである。

一〇一一（寛弘八）年六月、病を得た一條帝は、皇太子居貞親王（冷泉の皇子）に位を譲り、次の皇太子に亡き定子の生んだ第一皇子敦康親王を立てようと考えたが、道長は同意しなかった。

定子の死後、敦康をひきとつて手もとで養育してきた彰子も、わが子敦成がまだ幼少でもあり、先ず敦康を立てるにしかずと考えて、父を説得しようとしたが、これも厳しく撥ねつけられた。一條帝は病状がはかばかしくないために、すべてを道長に托した形で譲位し、ただちに出家した。彰子に

露のみのかりのやどりに君を置きて家を出でぬることぞ悲

しき

の一首を残して三十二歳の生涯をとじたのは、それから僅かに八日めの夜であった。

### 〈第二の後〉

こうして即位したのが三條天皇である。道長が強く主張して擁立した皇太子敦成は、まだ四歳の幼児にすぎない。先帝一條がわずかに七歳で即位した時、皇太子となった居貞は四歳年長の十一歳であった。長い東宮時代を経て、すでに三十六歳になっている三條帝は、東宮時代に大納言藤原濟時の娘娥子を娶り、何人かの皇子をもうけていた。長子の敦明親王はこの年には二十三歳に達している。しかし、道長は、彰子の妹研子を三條天皇のもとに入内させ、その翌年には、一條朝に自らがひらいた先例を踏襲して、研子を中宮に立て、娥子に皇后の尊稱をたてまつって、二后並び

立つ世を再現させたのである。研子は十八歳であった。

二年後に研子も皇女を生んだ。皇子でなかったと知った道長は、落胆したのであろう、祝いに訪れた人たちにも会わず、ひき籠ってしまっていたという。実資は例によって『小右記』に、「人間業ではどうすることもできないことで、人がとやかく言うべきことではない。」と、その態度を非難している。

東宮時代から固疾の眼病に悩み続けてきた三條天皇は、即位の後も健康を回復することはできず、病状は一進一退の繰り返しであった。在位中の僅かな期間に二度までも内裏が焼けるという不祥事が続いて、これも天皇の気持を暗くする原因になった。孫である皇太子敦成の即位を切望していた道長は、病状が好転して天皇が気持を取り直したのを見ると、不機嫌になったと伝えられている。

心にもあらで憂き世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな

『小倉百人一首』にも入っているので、よく知られている三條天皇のこの歌は、『後拾遺集』には「例ならずおはしまして、位なども去らむとおぼしめしけるころ、月のあかりけるを御覧じて」の詞書きを伴って収められており、『栄華物語』の「玉の村菊」の巻によると、師走十余日の月の明るい夜、清涼殿の上の御局で中宮研子にむかって詠みかけた歌となっている。天皇が道長の膝詰談判に屈して、来年正月には退位することを約束させられたのは、内裏が二度めに炎上した一〇一五（長和四）年一月のことであった。眼病が悪化して失明の危険にさらされていたのも

事実である。それを表面上の理由にして、しきりに退位をうながす道長の本心が、彰子の生んだ孫で、九歳になった皇太子敦成の即位をすこしでも早く実現したいという願望にあることは、分り過ぎるほど分っていた。譲位の代償として、天皇が道長に承服させた條件は、次の皇太子として、自分の長子敦明を立てるということであつた。

失明の予感に戦きながら、見納めになるかも知れぬ夜半の月をしみじみと眺める、さらでだに退位を約束したいま、清涼殿から月を見ることが再びはありえない。悲しみと憤り——歌の心は哀切である。三條天皇には『詞花集』に収められたこんな歌もある。

秋にまたあはむあはじも知らぬ身はこよひばかりの月をだに見む

### 〈第三の後〉

三條天皇の譲りを受けて、皇太子敦成が即位したのは、一〇一六（長和五）年二月である。約束通り敦明親王が皇太子に立てられた。九歳の天皇に対し、皇太子は二十八歳の壮齡である。天皇の外祖父として、道長は摂政に任ぜられた。道長が内覧の宣旨を受け、摂関家藤原氏の「氏の長者」の地位についたのは、九九五（長徳四）年の昔であつた。いらい二十年間、着々と地歩を固めて、父祖の誰よりも大きな権勢を手中に収めていた。にもかかわらず彼が公然と摂関の地位に昇つたのは、この時が初めてである。しかし、道長はその地位に執着することはしていない。翌年三月、権大納言だった長男頼通を内大臣に昇任させ、摂政を譲っている。四月には年号も寛仁と改まった。五月に三條院が世を去

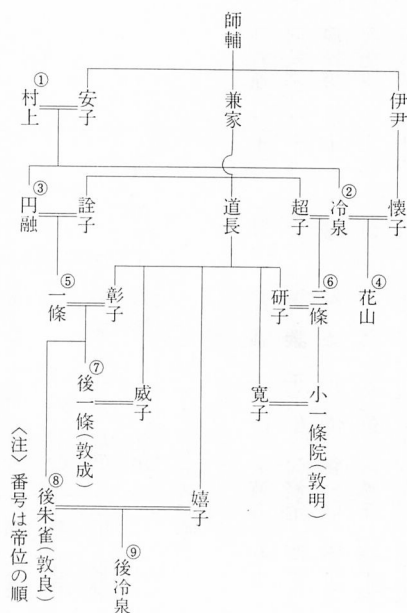


っている。名簿に入っている二十二名のうち藤原氏の十八名の続柄を系図の形で示すと前ページのようになる。年齢と官位との関係がどうなっているか、照合してみてほしい。道長中心の世界であることが、はっきりと理解できるに違いない。

系図に入っていない残りの四人はいずれも源氏だが、納言になっっている上位の二人、俊賢⑧と経房⑬とは、九六九年の安和の変で失脚した左大臣源高明の子で、師輔の娘を母とする同腹の兄弟であり、道方⑭は宇多天皇の曾孫で、雅信の弟に当る重信の子、頼定⑮は冷泉・円融帝と同腹の兄弟である為平親王の子、そして二人ながら母は源高明の娘であった。ということは四人ともに道長の妻倫子・明子につながる姻戚ということになるだろう。

天皇の元服を待ってこの年四月、二十歳で女御となった威子の中宮冊立は、以上のような情勢の中でとり行われた。先帝の中宮であった研子は皇太后、そして彰子には太皇太后の宣旨が下っている。歴史上「未曾有」の「一家立三后」の実体は以上の通りである。天皇と東宮は共に彰子の生んだ外孫であり、長男頼通を中心とする政府の中樞は、多少は批判的な考えを持つ者があるとは言っても、まず完全に一門で固めきったと言ってよいだろう。道長が摂政を頼通に譲り、太政大臣を固辞したのも、息子へのバトンタッチを早くして、自分が元氣な間に頼通の権力を確かなものに固めておこうという、将来を見越しての深謀遠慮だと考えて誤りはないはずである。この翌年、道長は出家しているが、政界を引退する意志は毛頭なく、一〇二七（万寿四）年、六十二歳で世を去るまで、最大の勢力を保ち続けた。彼の生きた時代の天皇家

の系譜と藤原氏出身の生母の関係をまとめると次のようになる。



道長には、それぞれ多くの子女をもうけた三人の妻がいた。いずれも宇多または醍醐系の源氏で、道長がいかに深く源氏系の名門に執着していたかがうかがわれる。頼通、教通、彰子、研子、威子、嬉子の母である倫子は、円融朝の九七八（天元二）年から一條の九九二（正暦四）年まで、左大臣の地位にあった宇多天皇の孫源雅信の娘であった。つぎは安和の左大臣源高明の娘明子で、頼宗、能信、顯信、長家、寛子、尊子を生んでいる。あとのひとは一條朝の初めに大納言まで昇った源重光の娘で、その腹に長信、盛子が生れた。「三后」の母である正妻の倫子は、道長と同じして暮したと考えられ、入内した娘たちの後見という点でも、道長と常に行動を共にしている。三后と同母の妹にあたる嬉子は、

後朱雀帝（敦良）の東宮時代に妃となり、後冷泉帝の生母となったが、出産の後、十九歳で早世している。後朱雀の中宮は、頼通の養女姫子である。道長死後のこととなる。なお、道長の意を迎えて皇太子を退いた敦明親王は、小一條院と呼ばれた。道長は、明子腹の寛子を小一條院の妃におくり、後々まで手厚く遇して、その志に応えていることを付記しておく。

## II いづれの御時にか

### ——『源氏物語』の時代設定——

一條、三條、後一條と三代の帝に、藤原道長は、すべて自分の娘を中宮に立てた。それが『源氏物語』の作られた道長の時代の実際である。ところで『源氏物語』にも三代の中宮が登場してくる。一人は、桐壺帝の中宮に立った藤壺、後の薄雲女院である。

「輝く日の宮」と稱えられたこの女性、先帝の第四皇女で、その中宮を母として生れたという設定になっている（桐壺）。次に位を継いだ朱雀帝には、どうやら中宮冊立のことが無かつたらしい。朱雀帝は、光源氏に降嫁して罪の子薫を生んだ女三の宮の生母である藤壺女御を、中宮に立てたいという気持ちを抱きながら、ついに果さなかったという記述がある。この女御は、桐壺帝の御代の藤壺中宮の異母妹に当り、皇女ではあるが更衣腹であったことが、帝のための原因になったという（若菜上）。また、朱雀朝の後宮を左右する権勢を握っていた帝の生母弘徽殿の太后の望みは、自分の妹である寵月夜の尚侍を中宮にということであったようだが、尚侍と光源氏との交情の発覚が妨げとなって、実現

しないで終った（賢木）。次の冷泉朝には、光源氏という強力な後見に支えられて、時の内大臣を父にもつ弘徽殿女御を抑え、梅壺女御が冊立された。秋好中宮である（少女）。六條御息所を母とする、前東宮の皇女であることは言うまでもない。承香殿女御を母として朱雀帝の第一皇子に生れ、冷泉帝の譲りを受けて即位した今上帝の中宮は、光源氏の娘である明石の姫君ということになる（御法）。こうしてみると、『源氏物語』の世界では、三人の中宮がごとく皇族ないし賜姓源氏の出身となっていて、現実の世界のそれと極端に対照的な形となっていることに注目してよいと思う。『源氏物語』が、光る君と呼ばれた賜姓源氏を主人公としていることに導かれ、物語の自然な展開の上でそうなってしまったと言っただけではすまされないものがそこにはある。『源氏物語』は、徹底的に「源氏の物語」として描き上げられているのであった。

わたしたちはここで、『源氏物語』が「いづれの御時にか」と書き始められていることを、想い起こさなければなるまい。『源氏物語』の世界は、まず最初に、それが現在ではないことを宣言することから、開かれていくのである。四代の帝皇の治世にまたがり、七十数年の長い時間を内に包む物語を構想した時から、歴史上のどこかの時点に、描き出されるはずの最初の社会を、作者が求めなければならないことは当然であった。「どの天皇の御治世であったか」という書き起こしは、たんに「昔」とか「今は昔」という、古物語が常用した語り出しに比べて、はるかに現実的な色合いを帯びている。思い浮かべようにも、どうにも焦点を結ば

ないような漠然とした「むかし」ではなく、思い出せる限りの過去の記憶のなから、具体性を帯びたある時代、ある社会を呼び醒し、つむぎ出すことを読者に要求する。そんな書き起こしだといつてよいだろう。

「いづれの御時にか」——現実のある時代、ある社会に虚構の世界を設定しながら、それがどの天皇の治世であるのかを明示しない形で物語を書き始めた作者は、読者にもいつの時代のことかが何となく推測できるような表現を巧みに織り交ぜながら「桐壺」の巻を書き進めていく。最愛の更衣を失って、悲しみにかきくれている帝は、「この頃、明け暮れ御覽する長恨歌の御絵、亭子院の書かせ給ひて、伊勢・貫之によませ給へる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、まくらごととにせさせ給ふ。」といい、高麗の相人に光源氏を觀させる時には、「宮の中に召さむ事は、宇多帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館に遣したり」と記すのである。

現存する西本願寺本三十六人集の『伊勢集』にも、「伊勢日記」と通稱される冒頭の日記的部分にすぐきつづいて、「長恨歌の屏風を亭子院のみかどのかかせ給ひて、その所々よませ給ひける」という題詞をもつ歌が、「みかどの御になして」として五首、「これはきさきの御歌にて」として五首、計十首まとまって収められており、宇多上皇すなわち「亭子院の書かせ給ひて、伊勢・貫之によませ給へる」「長恨歌の御絵」が屏風として実在していたことを裏付けている。また、寛平御遺誠には「外蕃の人、必ず召見すべき者は、簾中に在りてこれを見よ。直に対すべからず」の語

があり、「宇多帝の御誠あれば」という表現はこれを指して言ったのであろう。いうまでもなく寛平は宇多治世の年号であり、京都の七條朱雀の地に設けられていた鴻臚館は、来朝の外国人を接待する為の官舎である。そして、この相人の言葉もあつて、桐壺帝は光る君を臣籍に下して源氏にしようという気持を固めていくというふうには物語は展開するのだが、ここまで読み進めてきた読者は、誰しも物語の世界が宇多天皇に続く時代に設定されていることに気づくはずである。宇多天皇に続く醍醐天皇の治世は、八九七（寛平九）年から九三〇（延喜八）年まで三十四年の長きにわたった。『源氏物語』の書かれた十一世紀初頭から七十年ないし百年の昔に当たっていて、『源氏物語』の描き上げた架空の歴史七十六年とはば見合うことになる。

ところが、更に読み進めていくと、その醍醐天皇その人が、「明石」の巻で話題の中に登場してくる。明石入道が光源氏にむかつて、娘の明石の上が筆を弾くことについて、「なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること三代になむなり侍りぬるを……ものの切にいぶせきをりをりに掻き鳴らしはべりしを、あやしうまねぶ者のはべるこそ、自然にかの前大王の御手に通ひてはべれ」と言っているのがそれである。延喜帝→前大王→入道と相伝した奏法を、娘の明石の上が自然に会得して、よく弾きこなすと語っているのだが、ここでは延喜の帝すなわち醍醐天皇を話題にしながら、物語の中の桐壺帝とかかわりに全く触れようとしない事実注目しなければならない。作者は、言わず語らずの間に、桐壺帝が醍醐天皇ではないことを読者の前に明らかにしているのだ



と考えられるからである。延喜の代と重なり合うかに見えて、そこに君臨するのが醍醐天皇ではないことに気がつかせられた読者は、いや応なしに、物語の世界が延喜の治世のそれに似ていないがら、それとは異なる虚構の世界であることを思い知らされることになる。それはあたかも宮澤賢治が『グスコーブドリの伝記』に描くイーハトーブが、隅から隅まで現実の岩手縣を思い起させながら、それでいて岩手縣とは異なる架空の理想郷であることと似ているといつてよからう。

虚と実との間を縫いながら、虚構の物語世界を構築していく為の手立ては、『絵合』の巻に至って一層の光彩を放ってくる。

朱雀帝は位を退き、すでに冷泉帝の治世となっている。絵の好きな冷泉帝の寵を得ようと、後宮ではかつてない絵画ブームが起っていた。その中心となつて競い合っているのは梅壺女御と弘徽殿女御である。天皇の生母藤壺の宮は、源氏とはからつて、伊勢斎宮を辞任した六條御息所の遺児を入内させた。これが梅壺女御であり、斎宮女御とも呼ばれている。初めはこの年上の女御よりも、先に入内していた年若い弘徽殿女御の方に愛を傾けがちであった冷泉帝だが、次第に絵の上手な斎宮女御に心を移すようになってきた。帝の気持を娘の弘徽殿女御に引き止めようと躍起になつた父親の権中納言（源氏の最初の妻葵の上の兄）は、名高い絵師を集め、特に吟味した用紙に、いま流行の興趣豊かな物語を選んで絵に描かせ、帝の心を引こうとする。これを知つた源氏の君は、昔の物語絵の数々を梅壺女御に献上した。双方が絵集めに熱を入れ、梅壺の方は古物語、弘徽殿女御は今物語と競い合うので、

藤壺の宮も見捨て難く、その御前で絵合が行われることになった。まず、梅壺女御の方からは『物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁』、右の弘徽殿方からは『宇津保の俊蔭』を出して合せる。『竹取』のそれは「絵は巨勢相覧、手は紀貫之書けり。紙屋紙に唐の綺を陪して、赤紫の表紙、紫壇の軸、世の常のよそひ」であるのに対し、『俊蔭』の方は「白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は常則、手は道風なれば、今めかしうをかしげに、目も輝くまで見ゆ。」という有様である。「次に伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらず」と、この時の絵合は白熱の度を加えていくことになるのだが、この場面に記された絵師、書家の名が全て歴史上実在の名手の名であり、しかも古物語の巨勢相覧と紀貫之が延喜の代の人であるのに対し、今物語の飛鳥部常則、小野道風が村上天皇の天曆期の人物であつて、物語の世界の昔と今とは、歴史的事実ときっちり照応する形になっているのである。そればかりではない。この絵合にあつて左右の方人に配された女房名が、左方に平典侍、侍従内侍、少将命婦、右方には大式典侍、中将命婦、兵衛命婦と列記されているのだが、これも村上朝の天徳内裏歌合の時に、方人となつた女房たちの名がそっくり持ちこまれていることに注目しておきたい。この絵合の後に、朱雀院は秘蔵の絵巻二巻を梅壺女御に贈るのだが、その一巻は「年の内の節会どものおもしろく興あるを、昔の上手どものとりどりに描かけるに、延喜の御手づから事の心書かせ給へる」ものであり、他の一巻は「またわが御世の事も描かせたまへる巻に、かの斎宮の下りたまひし日の大極殿の儀式、御心にしみて思ければ、描くべ

きやうくはしく仰せられて、公茂が仕うまつれるが、いといみじき」絵巻であつたとある。実の醍醐天皇が「手づから」説明の詞を書いたという節会の絵巻に、虚の朱雀院が絵柄を詳細に命じて描かせた絵巻を配するのであり、さらに虚の朱雀院には実在の絵師巨勢公茂を交錯させるという具合で、虚と実との綾なす世界は、模倣としていずれとも分き難い感を抱かせる。

弘徽殿女御の方にも、母方の縁につながる大后や臘月夜尚侍からの加勢があり、いよいよ冷泉帝の御前における内裏絵合へと展開していくのだが、この内裏絵合の有様は、村上天皇の御代、九九〇（天徳四）年閏三月尽日に催されたあの天徳内裏歌合さながらである。歌合における州浜台が、絵合では絵巻を収めた箱にとり代っているなど、当然と考えられる違いはあるが、絵合の催された場所、方人である女房たちの配置や装束、参加した殿上人の位置、行事の進行の様子、何から何までが天徳内裏歌合に酷似した形で描き出されていく。

『源氏物語』のこのような記述を証として、鎌倉時代の古註釈書いらい、桐壺帝は実在の醍醐天皇に、冷泉帝は村上天皇になぞらえて書かれているとする見方が極めて強いが、一つ一つの場面の表現だけを取り上げて見る時には、いちがいに否定し去ることもできないだろう。ただ前にも述べたように、『源氏』の作者は、桐壺帝が延喜の帝その人ではないことを明かにするための手立てを尽しながら、物語の世界を展開しているのであり、すでに本居宣長は、このような准拠論をしりぞけて、次のように述べている。

物語に書きたる人々の事ども、みなことごとくなぞらへて、

あてたる事にはあらず、大方は作り事なる中に、いささかの事を依り処にして、そのさまをかへなどして書ける事あり。また必ず一人を一人にあてて作れるにもあらず。（中略）おほかたこの准拠といふ事は、ただ作りぬしの心の中にある事にて、必ずしも後にそれを悉く考へあつべきにしもあらず、とてもかくても有るべきなれど、昔よりさたしあへる事なる故に、今もその趣をいささかいふなり

まことに的確な見解である。「一人を一人にあてて作れるにもあらず」という指摘は、まさにその通りという他ないし、この「絵合」の巻などは、「いささかの事を依り処にして、そのさまをかへなどして書けることあり」の最も適当な例だといえる。わたしたちは、宣長の教示に従って、作中人物のモデルなどとはどうして「後にそれを悉く考へあつべきにしもあらず」と見定めることにしよう。しかし、「作り主の心の中に」いわゆる延喜天暦の治世があつたに違いないということまで否定することはできないと考える。

それにしても『源氏物語』の世界は、どうして延喜天暦の治世の影に構築されねばならなかったのか。あるいは、延喜天暦の影の世界の物語は、どうして「源氏の物語」でなければならぬのか。この問題を解明する為には、古代王朝の歴史をふりかえって検討してみると共に、それが藤原道長や彰子や、とりわけ紫式部の心の中に、どんな影を落とし、よどみを作っていたのかを見定めてみる必要があるように思う。

（早稲田大学）